

# ホストの異文化接触に関する研究課題の展望 —ゲストとの交流と関係性についての実証的研究— Hosts in Intercultural Contacts: Empirical Study on Host - Guest Exchanges and their Relationships

奥西有理 Yuri OKUNISHI

田中共子 Tomoko TANAKA

## 要約

本論では、外国からのゲストを迎え入れるホストに関する先行文献を、大学における学生交流及び地域におけるホストファミリー交流という2つの教育的場面の交流に絞って概観する。大学における交流をみると、留学交流に関する研究蓄積が多く、特に異文化滞在者であるゲストの困難への関心が高い。一方で、受け入れ側であるホストについての研究は、比較的僅かである。大学での交流を巡っては、ホストとゲストの関係が進展しづらい現象が頻繁に注目されており、その原因を究明する試みから、両者間の認識の齟齬が明らかにされてきた。しかし両者の齟齬を埋めていく方法となると、日本人と留学生の交流実践によって両者の隔たりが埋められるとする簡易な報告はあるが、学術的背景を備えた介入実践などの緻密な実証研究はない。両者の関係改善に向けた、教育的介入の研究の進展が期待される。地域のホストファミリー交流においては、アカデミックな観点からの研究例は少なく、体験談や経験則の報告が中心となっている。数少ないアカデミックな立場からの報告には、現状や課題を整理して報告したもの、満足度を調べたもの、特定のコミュニケーション理論に少数のサンプルを当てはめて解釈したものがみられる程度で、体系化されるに至っていない。すなわち実証研究の質的・量的な不足が指摘できる。ホストとゲストがどのような葛藤に出くわし、どのようなプロセスを経て関係を改善させていけるのかという問いに対しては、まずフィールドの現実に密着したデータ収集と理論化の試みが求められる。ホストは教育交流を通じて変容するのか、それはどのような道筋を経るのか、変容は教育的に促せるのか、人為学習と自然学習はどう異なるのかなどが、今後の解明を要する課題と考えられる。ホストとゲストの接触を巡る研究がホストの側からも蓄積されていけば、両者のダイナミックな関係がより解明できるものと期待される。

## 1. 本稿のねらい

国際的な人的流動性が高まる中、自国以外の外国に滞在したり居住したりする機会は、以前にも増して広がっている。その中で、教育もグローバル化の時代を迎えている。海外の教育機関に正規に入学し卒業と学位を目指す学び方以外にも、自国の教育機関に所属しながら派遣留学生や交換留学生と

して短期間外国で学ぶなど、多様な異文化滞在が広まっている。日本の高校や大学などでも、日本人学生が留学生と共に学ぶ機会は増えてきた。地域では、その留学生たちが日常生活を営んでおり、アルバイトや交流行事などは市民とふれあう機会になっている。地域では、ホームステイ等の形態で、家族ぐるみで留学生を受け入れる試みも拡大している。日本では今後、福田内閣のもとで中央教育審議会に提出された「留学生30万人計画」の実現<sup>1</sup>に向けて、これまで以上に多くの留学生が日本で学ぶようになることが予想される。こうした教育交流の広まりの中で、受け入れ国の人々であるホストと異文化滞在外者であるゲストは、学校や地域で日常的な接触に基づく関係を紡ぎ出していく。接触機会の増大は、ホスト社会にも少なからぬインパクトをもたらすものと想像される。

ところが留学交流の研究をみると、異文化滞在外者の困難が研究上の関心を集めがちで、ホスト社会に関する研究は等閑視されてきたように思われる。一時滞在外者である異文化からのゲストが、ホスト文化でいかに適応を果たすかについては、多数の研究蓄積がある（例えば、Berry, 1990; Tanaka et al., 1994）。これは滞在外者への支援という社会的課題に込めるべく、研究が進められたものと推測される。しかしその一方で、ゲストの存在がホストに与えるインパクトや、ゲストとの接触によるホストの変容など、ホストの心理に焦点をあてた研究の蓄積は極めて少ない。池田・クレマー（2000）は、ゲストの異文化不適応を問題として取り上げてきた先行研究の問題は、一方の側（ホスト側）からの視点のみで現象を捉えていること、そしてゲストとホストによる新たな文化環境のダイナミックな関係がその視野にはなかったことだと批判している。

ごく最近になって、ホスト社会の構成員を対象とした研究が散見されるようになったが、これは米国の同時多発テロ9・11以降、ホスト国の人々による、移民や移民政策に対する姿勢に焦点を当てた研究に、注目が高まったことを受けている（Leong, 2008）。だが留学交流の研究においては、依然としてホスト研究が省みられることは希である。また、そのわずかな研究も、異文化接触を経たホストの反応や変容をモデル化したり総括したりする段階には至っておらず、研究者の個人的な関心が強調されがちであるという（Leong, 2008）。山本（1996）は、ゲストに比してホストが留学交流の研究対象に取り上げられることが僅少であることを指摘しつつ、「ホストとしての日本人」を研究対象とする意義を主張している。それは異文化接触による個人の「内的変革」の問題を、海外に赴く特定層の人々の問題にとどめず、日本人一般の問題とすることを可能にするものだという。この視点は、在日外国人の増加している現在の日本で、外国人への様々な偏見や差別を内的に解消する可能性を探ることにつながる、と社会的意義を強調している。つまりホスト社会の構成員として、ゲストの困難に抱く問題解決的な関心のみならず、多文化共生社会の構築に向けた示唆の獲得を目的とするならば、異文化接触に伴うホストの心理的研究は欠かせないものになると考えられる。留学生とどう交流し、どのような関係を構築していくのか、両者の異文化接触における対人関係と交流のあり方を解き明かしていくことは、この意味で今日的で興味深い心理学的な課題となるように思われる。

本稿は、数少ないホスト研究を概観し、研究視点と研究成果を整理した上で、研究上の課題を探る。

異文化滞在者と受け入れ国のホストとの関わり合いを、従来の主流であったゲストの異文化適応という観点からの研究に限定せず、ホストによる異文化葛藤の対処や異文化接触への対応、ホスト自身への異文化接触の影響過程や態度変容の現象という視点を、積極的に適用してみたい。異文化間の対人関係における動的な過程を探求することは、グローバル化する世界でゲストとホストが互いに影響を受けながら共存する、多文化共生の実現への道筋を、対人関係の構築という側面から読み解く手がかりを提供する。

本稿では、留学交流の世界的隆盛を背景に、日本で更なる増加が見込まれる留学生とその周囲の他者との関係に焦点を当てていきたい。中でも、一時滞在者である留学生の受け入れを巡って、教育場面と家庭場面に登場するホストの研究に注目する。教育場面は、大学での留学生教育や国際教育への関心から派生した、いくつかの研究をみていく。家庭場面は、いくらか報告例が存在するホームステイの場を指す。これは地域場面の中でも、近年のホームステイ制度の拡大を背景に社会的注目を集めやすく、いくばくかの報告が行われたものと思われる。ゲストとの接触、ホストの関わりや対応、そして両者の関係性の構築という観点から先行研究を概観し、その上で、どのような観点からの研究が不足しているか、どのような点の解明が望まれるか、学術研究上の課題を論じていきたい。

## 2. 教育場面での研究 —大学における異文化間対人交流

教育場面での対人交流に関する研究としては、ホストとゲストの相互認知、大学での交流活動、研究室の対人関係、友人関係などが取り上げられてきた。

留学生を日本の大学に受け入れた場合、留学生が日本人と友人関係を持ちたいと願うにも関わらず、日本人の友達が出来にくく、ホストとゲストの相互交流が思うように進んでいないことはしばしば指摘されてきた(坪井, 1991; 田中, 1995; 栖原, 1996; 花見, 2003)。また、日本に限らず、ホスト学生と留学生の交流が進まないという現象については、日本に先んじて外国の文献で指摘されてきた(Bochner & Orr, 1979; Furnham & Alibhai, 1985; Bochner et al., 1985)。日本の大学において、ホスト学生と留学生の交流が進まないことの原因を探るため、ゲスト側のみならずホスト側の知覚や認知を調査した研究では、ホスト・ゲスト交流の不活発の背景には、双方の認知のすれ違いがあることが示唆されている。田中(1995)では、日本人学生が語学フォビア的に自らの外国語能力の不足に帰属する一方で、留学生は日本人の無関心や否定的感情に帰属して、両者の溝が深まる可能性を指摘している。勝谷ら(2001)は、架空のストーリーを呈示して、その原因認知を留学生と日本人グループそれぞれに尋ね、両者に相互知覚ギャップが存在することを見出した。特に、日本人被験者については、相手に対してネガティブに知覚することが、接触欲求さらには実際の接触を減少させている可能性さえ示唆されたという。しかし両者の乏しい関係性が、介入によって改善する可能性も示唆されている。授業の場で相互交流の場を創造して双方の意識の変化を探った実践報告(栗山, 2003; 有田, 2004; 坪田, 2004)では、交流を活性化させるため、日本人学生と留学生がともに意見を交換できるワーク

ショップ開催等の教育的試みにより、両者に交流機会の必要性への気づき、違いへの気づき、自文化への気づき等がもたらされる可能性を示した。

横田（1991）は、留学生と日本人学生との関係が親密にならない原因として考えられがちな項目を用意し、留学生と日本人学生の両方に、それらがどの程度親密化を妨げる原因になっていると思うかを尋ねた。すると日本人学生と留学生では、対人関係形成初期において、互いへのアプローチの仕方に異なった特徴があることが分かった。留学生は、一対一の付き合いを通して個人的な意見を交換することで相手を知ろうとする。それに対し日本人学生は、留学生にクラブやコンパなどの集団活動へ参加してもらうことを希望し、個人的な対話をすることなく初期の緊張を軽減しようとしていた。留学生と日本人の親しい関係ができるためには、ホストである日本人側が、留学生側の初期の緊張感を受け入れ、個人ベースの会話を積極的に行うことが鍵だと考察されている。このデータは、関係開始のスキルが異なることを意味しているように思われる。日本人学生は、集団に入ってきた方が仲間として受け入れやすいと感じたり、友人関係は集団活動に参加することで築かれると思っているのかもしれない。だとすると留学生の友人の作り方とは流儀が異なってしまう、それが関係性形成のハンディになる可能性が考えられる。

日本人の留学生チューター<sup>2</sup>と留学生との、親密化と友情関係形成に影響を及ぼす要因を調査した新倉（2000）は、留学生と日本人学生の両群を対象に、相手の性格上の特性や行動に関する認知について調査した。チュータリング当時及びその後のチューターと留学生の関係について、親友とか顔見知りとか、6種類の想定に即して相手の認識を尋ねている。その結果、チュータリング当時のチューターと留学生には、相手に求める要素にずれがあったという。留学生は、チューターとしての関係という友人関係にまで発達していない程度のものであるとしても、相手に異文化への関心を求めており、このような親密化の初期の段階から、チューターに様々な国に関する知識を望み、互いの国の文化や政治について語り合いたいと思っていた。一方で日本人学生は、親しい関係になって始めて、留学生の抱える異文化への関心を高めている。こうした要求のずれの違いを鑑みて、日本人学生が留学生と接し相互交流が促進されていくためには、日本人学生の側が、視野を広くとって外国の文化に関心を向ける必要があり、その育成が課題だと考察されている。つまり相手の国や文化に関心をもちたいと、関心をもってほしいと願う留学生とつきあっても、なかなか関係が深まらないとみている。横田（1991）と同様に、交流推進のためには日本人ホスト側の努力が欠かせないという結論になっている。両者とも留学生と日本人学生のずれを指摘した上で、合わせるべきはホストの方である、という主張を展開している。

服部（2005）は、ホストがゲストと接触する社会的場面として大学学部交換留学生との交流活動、地域日本語支援活動、及び大学院理工系研究室という3つの教育場面を取り上げ、それぞれの文脈によりホストがゲストといかに関わり、関係性を構築していくかを調査した。それぞれ、ホストである交流活動に参加した日本人学生、日本語支援ボランティア、研究室の日本人構成員（教授、助手）へ

のインタビュー調査が実施されている。主な注目点は、ホストは留学生や外国人をどのようなカテゴリーで捉えているのか、ホストのゲストへの態度、時間の経過に従って関係性が変化する様子、及びホストの意識変化である。総じて、時間が経過して接触や交流が進むにつれ、「日本人-外国人」「ホスト-ゲスト」の意識が薄れ、個別化（相手を個人として捉える）が進む傾向があるようだという。各フィールドで、ホストの態度の特徴と課題は異なると報告されている。交換留学生との交流場面においては、交流活動を通じて留学生に「何かをやってあげる」ことから「一緒に何かをする」方向に変化した。一方で、地域日本語支援活動においては、日本人=与える人、外国人=与えられる人という固定化した関係があまり変化せず、一方通行的な支援が続いたとしている。理工系研究室場面では、日本人は、「国際化」を「英語の使用」であると考え、留学生を英語や異文化の情報を得る対象とみなすが、同時に、留学生には研究室に備わった規範を察して実践することを期待していたという。服部の研究は、複数の社会的場面の差に目を向けた点で興味深い。ホストとゲストが与えられたコンテキストにおいて交流を推し進めていく中で、時間の経過により、社会的カテゴリーからの脱カテゴリー化が進み、対個人の関係という趣を強めていくという視点も、注目される。その進行過程は両者が出会うコンテキストや、ホストの役割の規定、交流の内容に依存するという簡単な指摘がなされている。言い換えれば、脱カテゴリー化が進むことを指摘しているが、役割規定に基づく関係性が強いときは、個別化が進みにくいということだと思われる。またホストとゲストの関係性が、時間的に変化するという現象を指摘した研究の一つとしても、注目される。

大学キャンパスにより多くの留学生を受け入れさえすれば、国際交流が自然に深まり、ホストとゲストの相互理解が促進されるという結果には、残念ながらもなっていない。坪井（1999）は、ホストが「留学生をどう支援すべきか」という意図的な支援としての課題の立て方を離れ、「日本人学生の異文化交流能力を高めるために留学生をどう活用すべきか」「日本人学生と在日留学生が同じ学生として成長するために、お互いの文化の壁を乗り越えて交流し、相互啓発の機会を産み出すにはどうすべきか」（p.63）と捉えなおそうと提言している。これまで見てきたホスト学生の態度や意識の変容、および教育的介入の必要性を述べる研究からは、この提案に沿った方向性を読みとることができる。脱カテゴリー化を目指したり、共同性の構築を意識したり、対等性を希求したりしながら、これらがなかなかできないことを問題視する類の主張は、実証研究というよりは、交流はかくあるべしといった理念に基づいた論述の意味合いも強い。初期のホスト-ゲスト関係に顕著な支援-被支援関係を固定化したくないなら、理念を掲げてそれとの解離を取りざすだけではなく、相互性の強い交流の場を具体的に設定したほうが効果的であろう。つまり自然発生的ではなく、何らかの意図や方向性のある交流を実現する人為的な策として、ホストへの異文化間教育や混合グループへの教育的介入の研究が期待される。奥西・田中（2007）は、留学生支援ボランティアを務める日本人学生に対し、彼らが普段留学生との関わりの中で困難だと認識している葛藤場面についてコミュニケーションの回り方に関するセッションを実施したところ、認知行動両側面においてゲストへの対応の向上が見られたとい



う。但し、このセッションは予備的なものであり、試行的で、簡易なものであったことや、実際の日常場面での程度の改善がなされたかについては確かめられていないこと等、課題もあった。より緻密な異文化間教育の実施により、ホスト・ゲスト関係がいかに変化していくか、今後の教育実践と研究の蓄積が望まれる。

### 3. 家庭場面での研究 — 地域におけるホストファミリーと留学生の異文化間対人交流

次に、家庭場面でのホスト・ゲスト関係が展開されるケースとして、ホームステイ交流を取り上げてみたい。ホームステイに関しては、家庭という密着度の高い空間で交流が織りなされることから、あらゆるホスト・ゲスト交流の中でも、葛藤が想定されやすい異文化接触場面ではないかと思われる。だが頻発する葛藤に社会的関心が向けられることはあっても、アカデミックな視点から、この異文化接触を取り上げた研究はごく僅かである。自身のホストファミリー体験に基づくアドバイスや受け入れノウハウの紹介、心構えの指南などが多い（例えば、川村、1988; 関、1992; 平野、1993; 清水・大竹、1994; 多田、1995; 南、1996; 柳島、1996; 清水、2004; 班目、2005）。

例えば平野(1993)の体験談では、自らの11年間のホームステイ受け入れ体験を基に、ホストは、「同じ地球人として」「愛情をベースにした人間関係」をゲストと作ることが大切であると主張する。そして、具体的なアドバイスとして、構えず柔軟性を持つこと、積極的な心構えを持つこと等を挙げる。相手の文化的背景や心情立場に立って考えなければ、異文化葛藤が起ころうと指摘する。但しトラブルを伴う異文化体験を経て、ホストは異文化理解を果たし、留学生との付き合い方が分かるようになるという。葛藤がホストの成長をもたらす、という見方が述べられている。こうした着眼は、学問的に確認していけば、どれも興味深い研究になるだろう。体験を基にした異文化葛藤の例と解決のノウハウとしては、次のようなエピソードが紹介されている。

異質な文化の中で育った人々との交流で、大切なことは相手の文化背景、心情立場に立って考えること。例えば、朝「行ってきます」、「気をつけて、早くお帰り」。この会話の前に一言「日本では交通事故や遅く帰ると心配する。これは日本の親の愛の表現だよ」と説明しておく。すると「気をつけて、早く帰れ」が、「独立と自由への干渉との欧米流反発心」が消えて、親身と感謝の心にかわってくる (p.24)。

ホストファミリーは、自らの体験を通じて、日本的なやり方で接した場合に異文化葛藤が生じる可能性があること、そしてそれを避けるためには説明が必要だと認識している、ということが分かる。しかしながらこれは、実証的な分析や理論的な背景を持った見解ではない。体験談の形を取るため、現実味はあるが、個人的な意見という限界がある。客観的な分類や解釈、複数者の体験からの共通要素の抽出といった、研究の営みを通じた一般化の試みの行われることが課題であろう。

次に、このような家庭場面におけるホスト・ゲストの交流や関係を、個人の体験談として提示するのではなく、学術的に捉えようとしたものを見ていきたい。ホームステイ交流は、アカデミックな立

場からの報告であっても、実証的データに基づく論考というカラーは強くない。筆者の経験的知識、あるいは参加者による事後アンケートや感想の記述に基づいて、現状や問題の報告がされたり(見城、1997; 岡, 2005; 藤井, 2007)、参加者の満足度が報告されたり(厨子, 1998; Palisada & Kumai, 2004)、参加者の学びや営みの成果とされるものが報告されたりすることが多い(鈴木, 2000)。現状把握を主題とする場合も、実施状況や問題点の把握が主流で、異文化接触を心理的現象として捉える視点は希薄である。ホストとゲストが接触し関係性を構築していくダイナミクスも未解明である。また、満足度や成果の報告については、単純な想定に基づいた設問への回答数を羅列するに留まる。それが教育的に見てどのような意義があり、どのようなインパクトがあったのか、具体的な分析というところまで掘り込まれてはいない。

国外においても、ホームステイ交流は、国内と同じく、アカデミックな観点からの取り上げられ方はされにくく、ホストファミリーとして成功するノウハウ(Verstrate, 2006)や、ホストファミリーの視点からプログラム改善についての報告(Knight & Schmidt-Rinehart, 2002)にとどまっている。

ホームステイにおけるホストとゲストの対人関係に限れば、それを心理的現象として捉えた研究はいくつか存在する。八島(2004)は、日本人高校生のアメリカ人ホストファミリーに対し、ホームステイ中に生じたゲストとのコミュニケーション上の問題を、ホストの視点から尋ね、その分類と分析を行っている。ホストの視点からの研究という意味で意義があるが、あくまで、発生した問題を、ゲスト側の語学力や個人的性格、行動様式に帰責させる内容となっており、ホスト自身の対応の変化や変容について問うものとはなっていない。

手塚(1991)は、ホームステイ交流場面で発生するトラブルの原因について、ホストへのインタビューを行っている。そのデータをもとに、ホストと留学生のトラブルの原因について、異文化間コミュニケーションと日本文化・日本人心理の特質性という視点から分析を加えている。すなわち、ホストが、「甘やかし、年齢による上下意識、距離のおけない関係、相手に合わせ相手からも合わせてもらうことを期待する関係、相手からの察しに期待をかけ困惑を直接伝えようとしない」等、日本文化的価値観でふるまってしまったがゆえに異文化間コミュニケーションが生じ、トラブルが起きてしまっていた、と解釈している。日本人ホストに必要な態度や姿勢として、「留学生をお客様として特別扱いをしないこと、留学生を大人として扱い干渉し過ぎないこと、言いたい事が相手に伝わる努力をすること、異質性に対し柔軟な対応をすること」等、8つのポイントを挙げている。具体的な対応方法としては、「言葉に出して直接伝えること、柔軟に対応すること」を挙げている。すなわち、ホストの交渉と変容を推奨しているものと見なせよう。

山本(1994)は、日本人ホストによるホームステイ受け入れ場面を、コミュニケーションの型に着目して整理した。ホストのゲストに対する対人意識を、ホール(1976)と土井(1971)の理論を当てはめる形で、「日本型」(ゲストとの一体感志向)、及び「西洋型」(独立志向)に分類した。「どちらの対人意識の方がホームステイ受け入れに適しているかと言うことはできない」としながらも、日本人

ホストのコミュニケーションの円滑さの点からすると、独立志向の方が望ましいと述べている。そしてホストファミリーは受け入れ経験を通じて、一体感志向の対人意識から、独立志向の対人意識へと移行していくと推察している。この研究は、「ホームステイ」という営みを、単なるエンターテインメントの形態やホスピタリティーの発露ではなく、コミュニケーションの場として捉えたこと、変容の発生を指摘した点では、評価されるべきであろう。ただしこれは既存理論に基づく二極化を、2名のホストマザーに当てはめたに過ぎない。例数が極めて少なく、チャンピオンケースを分析したとしても、そのサンプリングに関する説明は見あたらない。この二分法がホストファミリー研究に適切かという妥当性や、この分類枠で多様なホストファミリーを的確に吸収できるのかという信頼性も、特に検討されていない。例えば、ホストが日本人である以上、「西洋型」だけが成功の方策ではなく、日本のスタイルで成功するケースもあるかもしれない。営みの成否と東西の特性が同一視されがちな点にも問題が残る。コミュニケーションの型を探求するなら、十分なデータに基づく仮説生成が求められよう。

続いて山本（1996）では、ホームステイ受け入れ場面で日本人ホストファミリーが、ゲストとの異文化接触場面において、いかに「日本文化」に規定されているか、及び異文化接触によってホストが何らかの「内的変革」を得るかの2つの視点からホストの変容について調査した。山本は、「日本的コミュニケーション」の内容を、ホール（1976）と土井（1971）の論に沿って捉え、公の場などでは低コンテクストでありながら親しい関係では高コンテクストという2側面を指摘した。そして「ウチ」には甘えを許容し、「ソト」には無関心の態度を取るという特徴に照らせば、「ソト」の者であるはずの外国人を、最も「ウチ」の世界であるはずの家庭に受け入れるホームステイは、日本人ホストが必然的に葛藤を感じる場だと解釈した。受け入れ経験が多いホストと少ないホスト1組ずつを比較すると、経験が少ないホストは、日本的な他者との一体感のある世界観をベースに、ゲストとの間にコミュニケーションのギャップや葛藤を起していた。だが経験の多いホストは、ゲストに対するコミュニケーション形態が確立されていたという。独立したものの同士の約束に基づく関係として特徴づけられ、あまり世話をやかないような関係であった。迷いがなく、はじめから、言うべきことは言うという点に迷いもなかった。ホストファミリーは、受け入れの葛藤経験を通して、コンテクストに依存する伝達方法は非効率であると気づき、言語によるコミュニケーションを志向するようになるかと推察している。そして、ホームステイの受け入れは、異質な他者とのコミュニケーション形態を獲得できるチャンスと意味づけている。ここではホームステイを、コミュニケーションの齟齬から来る葛藤発生場として捉えている。日本人ホストが無自覚に交流した際に陥る、コミュニケーションのギャップがあるとして、その構図を指摘したことは、興味深い。その原因帰属としては特定の文化に矛先が向けられ、日本の世界観で交流すると葛藤が起きるという解釈である。手塚も、日本文化的価値観でふるまうとトラブルになると述べていた。だが原因は日本の特質なのか、状況や個人の特質なのか、未熟者の特質なのか。これらは必ずしも精緻な識別を経ないまま、推測に基づく主張が展開されていく。齟齬



をきたす対応方法が観察されるとしても、文化特異的な原因なのか文化一般的な原因なのか、その分離は課題といえるだろう。なおホームステイで異文化コミュニケーションの向上が起きることを指摘し、学習や教育の機会として捉えたことは、異文化間教育的な意味の指摘として、意味深い。

藤野・田中(2006)は、在日留学生とそのホストファミリー8ペアを対象に、ホームステイ場面で問題を解決したり、対人関係を構築する「ソーシャルスキル」について整理した。もとより高いスキルを持っていた「高スキル」ホストと、ゲストとの接触過程の中でスキルを獲得していった「スキル上達」ホストは、ゲストの行動に違和感を持った場合、はっきりと伝えて話し合う必要性を認識しており、その実践もしていたという。そして、相互理解の進展のためには、文化差に向き合い、率直に語り合うというスキルが必要であり、それらはソーシャルスキル学習という教育的介入によって実現するとの提言を行っている(藤野・田中, 2006)。異文化交流には対応の成否や技能の高低があること、対応能力が向上する可能性があることは、手塚や山本に指摘されたことと共通する。だがここでは異文化交流の態度を、技能として捉えた点が注目される。この観点は心理教育的なアプローチへとつなぐ方法を提供するものであり、心理的介入の提案として興味深い。ここでは率直な対話と交渉を成功の鍵と見ているが、この能力への文化的意味づけには踏み込まず、単に必要な要素を挙げるスタンスをとっている。直接的な物言いは、一般に日本的とされる高コンテクストのコミュニケーションと馴染みにくい面もあるかも知れないが、成功している日本のホストはこれを使いこなしている。そして経験によって、向上する者もあれば停滞する者もいるという。不適切な対応が、一律の文化的ハンディに由来すると見るより、要素分解的に捉えて、個人差の観点からタイポロジー的な整理を進めることも考えるべきであろう。

以上のように、家庭場面での交流として、ホームステイ交流をフィールドとした数少ない実証研究では、ホストファミリーによるコミュニケーションや対応の方法が描き出され、時に文化的な意味づけを施される。そしてトラブルや葛藤例、成功例が注目されている。異文化接触の場としての性格付けをし、問題を起こしがちな場と認識してトラブル研究の場にする事が多いが、これからはうまく対応することへの期待も芽生えてくるだろう。ゲストへの対応型の下位分類や、葛藤の原因や進行、および解決のプロセスに関する、地道な研究蓄積が待たれる。社会的関心に応じるという意味では、葛藤を防ぐ予防的対応や、トラブルを処理する問題解決的な対応ができる能力の涵養を目的にした教育的試みを、企画・実施して効果を検証する、介入実践研究が期待される。

#### 4. まとめ

大学と家庭という2つの留学交流場面を取り上げ、ホストのゲストとの対人関係に関する先行研究を概観してきた。総じて、現場での困難を受けて、ホストの交流姿勢に内包される問題性を指摘したものが多く、その交流の不成功につながる態度を、日本文化に由来するものとして解釈するものも多く、「日本的発想」からの脱却を強調するものや、西洋文化をモデルに見なすものもある。全体に、

ホストに努力や変容を期待する論調が強い。しかし変容を捉える枠組みや能力を整理するモデルの工夫は十分とは言えず、理論構築への努力は端緒についたばかりである。ホストの自然学習が進み、自ずと変容し能力を上げていくという報告がある一方で、変容過程の分析は詳しくない。ホストとゲストの人為的交流の場を設け、交流実践による互いの学習成果を報告した教育的視点からの報告はある。交流実践は、企画の意図を明確にして、丹念に計画された介入研究の結果を緻密に分析していくことが課題であろう。現実的な対応のバリエーションという意味では、異文化に焦点化した対応と脱文化的な対応のバランスや、いずれかに偏った対応にみられる特質も、興味深い観点だろう。異文化接触をどうこなすかという点では、ゲスト研究の知見との突き合わせや、ゲスト・ホストの両者を対応させた研究も求められよう。

## 5. 今後の課題

ホスト・ゲストの接触を巡る従来の研究では、ゲストの異文化適応に注目した探求が多かった。しかしゲスト側だけに変容を期待したのでは、限界がある。交流の実現には、双方の努力が必要であり、この意味では共同作業の面がある。異なった文化の壁を越えていくホストには、どのような認知・行動上の変容が求められるのか。ホスト自身に求められることは、今のところ柔軟な態度や直接的コミュニケーションが中心である。ホストがこのような態度やコミュニケーション技術に習熟した時、異文化の壁が埋められ、個人対個人としてゲストと付き合えるようになる、という理想が描き出されている。だがこれで尽くされるものかどうかは、まだ検討が必要であろう。ホストが変容を成し遂げるには、どのような道筋を経ていくのか、変容は人為的に促せるのか、自然学習とはどう異なるのかなど、未解明の点は多い。現実の現象を基に、丹念に現象を追って知見を蓄積していくことが課題であろう。具体的には、まずはホストの異文化対応や、両者の関係性構築に関する仮説生成的研究を試みる必要があるとあり、そこから教育的介入につながる部分を見だし、応用研究を発展させていくことが期待される。

### 〔引用文献〕

- 有田佳代子(2004) 留学生と日本人学生の相互交渉創出の試み 敬和学園大学研究紀要 13, 129-147.
- Berry, J. W. (1990) Psychology of Acculturation. Applied Cross-cultural Psychology. Newbury Park, CA: Sage.
- Bochner, S. & Orr, F.E. (1979) Race and academic status as determinants of friendship formation: a field study. International Journal of Psychology, 14, 37-46.
- Bochner, S., Hutnik, N. and Furnham, A. (1985) The friendship patterns of overseas and host students in an Oxford student residence. Journal of Social Psychology, 125(6), 689-694.
- 土居健郎(1971) 甘えの構造 弘文堂

- 藤井桂子 (2007) 留学生センターホームステイプログラムの現状とその意義 横浜国立大学留学生センター教育研究論集 14, 61-78.
- Furnham, A. and Alibhai, H. (1985) The friendship networks of foreign students. *International Journal of Psychology*, 20, 709-722.
- 服部圭子 (2005) 異文化接触場面における参加者間の関係性—大学及び地域社会の3つのフィールドから 大阪大学言語文化研究科 博士学位論文
- ホール, E.T., (1976) 岩田慶治・谷泰訳, 1979, 文化を超えて TBSブリタニカ
- 花見横子 (2003) 日本人学生と留学生との交流 —サークル、混住寮、授業をとおして 留学生交流 2003, 2-5.
- 平野昭光 (1993) 163人の子どもたち—ホームステイ交流11年の日々 近代文藝社
- 藤野瑠弥・田中共子 (2006) ホームステイ場面におけるソーシャルスキル—在日留学生と日本人ホストファミリーの視点から 留学生教育 22, 101-110.
- 班目文雄 (2005) 国際理解教育からみたホームステイ 海外の教育 31(1), 34-43.
- 池田理知子・E. M. クレーマー (2000) 異文化コミュニケーション・入門 有斐閣アルマ
- 勝谷紀子・山本直美・坂元章 (2001) アジア系留学生と日本人学生の相互知覚ギャップ—女子の大学生に対する実験 社会心理学研究 17(1), 43-54.
- 川村千鶴子 (1988) 外国人をホームステイさせる本 中経出版
- 見城梯治 (1997) 千葉大学におけるホームステイ・ホームビジットプログラムの現状と課題 3, 71-79.
- Knight, S. M. & Schmidt-Rinehart, B. C. (2002) Enhancing the Homestay: Study Abroad from the Host Family's Perspective. *Foreign Language Annals* 35(2), 190-201.
- 栗山昌子 (2003) 異文化理解における日本人学生と留学生の意識 —ワークショップからの事例をもとに 福岡女学院大学紀要 人文学部編 13, A51-A74.
- Leong, C.H. (2008) A multilevel research framework for the analyses of attitudes toward immigrants. *International Journal of Intercultural Relations*, 32, 115-129.
- 南満幸 (1996) ホームステイ・ガイドブック (ホストファミリー用) 稚内北星学園短期大学紀要 9, 87-97.
- 新倉涼子 (2000) チューターと留学生の友人関係の形成と正確の特性や行動に関する相互認知 異文化間教育 14, 99-116.
- 関郁夫 (1992) ホームステイ—ホストファミリー—が語る成功の秘訣 パーソナルメディア
- 岡益己 (2005) 週末型ホームステイの実施とその問題点 広島大学留学生教育 9, 37-53.
- 奥西有理・田中共子 (2007) ホストのソーシャルスキル学習セッションに関する研究ノート—予備的セッションの実施 岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要 24, 78-64.

- Palisada, E. J. & Kumai, W. N. (2004) Host Families: Voices of Experience 南山短期大学紀要 31, 185-215.
- 清水禎子・大竹敏子 (1994) ホームステイin日本―わが家に外国人がやってきた! 窓社
- 清水禎子 (2004) ホームステイがやってきた―ホストファミリーの体験&ノウハウ 木魂社
- 栖原暁 (1996) アジア人留学生の壁 日本放送出版協会
- 鈴木潤吉 (2000) 地域の国際交流での学びとは?―赤井川村での留学生ホームステイにおけるホストと留学生の反応から 僻地教育研究 55, 115-124.
- 多田洋子 (1995) 外国人留学生のカルチャー・ショック―ホームステイ・マニュアル 南雲堂
- Tanaka T., Takai J., Kohyama T., & Fujihara T. (1994) Adjustment Patterns of International Students in Japan. International Journal of Intercultural Relations, 18(1), 55-75.
- 田中共子 (1995) 在日外国人留学生による日本人との対人関係の困難に関する原因認知 学生相談研究, 16(1), 23-31.
- 手塚千鶴子 (1991) ホームステイと異文化間コミュニケーション―日本人ホストファミリーからみた留学生の場合― 異文化間教育 5, 135-144.
- 坪井健 (1991) アジアの学生・日本の学生―留学生調査と日本・台湾・韓国の比較調査を通して 駒沢社会学研究 23, 115-144.
- 坪井健 (1999) 留学生と日本人学生の交流教育―オーストラリアとの比較を通して 異文化間教育 13, 60-74.
- 坪田典子・野沢智子 (2004) クラスを超えた学び合い―留学生日本語クラスと日本人学生英語クラス間交流 文教大学国際学部紀要 15(1), 117-131.
- Verstrate C. (2006) Homestay 101 For Hosts : How to Start and Run a Successful Homestay. UK: Exposure Publishing.
- 山本直美 (1994) 日本人ホストファミリーの異文化間コミュニケーションの構造―コンテクスト志向から言語志向へ お茶の水女子大学人文科学紀要 47, 159-177.
- 山本直美 (1996) ホームステイにおける異文化間コミュニケーション―日本人ホストマザーの対人意識の分析から 日本語教育・異文化間コミュニケーション: 教室・ホームステイ・地域を結ぶもの: (財)北海道国際交流センター主催日本語・日本文化講座夏期セミナー10周年記念論文集 北海道国際交流センター 149-171.
- 柳島純雄 (1996) ようこそ! ホームステイへ 教育書籍
- 八島智子 (2004) 第二言語コミュニケーションと異文化適応―国際的対人関係の構築をめざして 多賀出版
- 横田雅弘 (1991) 留学生と日本人学生の親密化に関する研究 異文化間教育 5, 81-97.
- 厨子光政 (1998) ホームステイを通じた国際交流に関する調査―カナダ人学生とホストファミリー

の関係 静岡大学情報学研究 4, 31-50.

〔脚注〕

- 注1 福田内閣になり「中央教育審議会」の下部組織である「留学生特別委員会」により提出された。2025年を目途に30万人の留学生受け入れを目標とする。
- 注2 留学生チューターとは、留学生支援のために大学から一定時間雇用された日本人学生で、外国人留学生に学習・生活について、マンツーマンで助言を行い、留学生を生活・学習面からサポートする役割を担う。